



コロナ危機がもたらす困窮者支援の困難

■ワクチン接種

立川市でもワクチン接種のお知らせが高齢者を対象として送られてきました。しかし、電話は繋がらず、ネットでアクセスできても予約日が埋まって予約できないなどの事例が多発しています。自治体から届いた「接種のお知らせ」は漢字を含んだ文字が多く、高齢者にはいつ、何をすればよいかが大変理解しにくいものでした。私たちが支援している人たちは、多くが電話を持っていませんので、予約は大変困難な作業となります。私はそうした人たちに向けてワクチンの接種の説明を始めています。しかし、調べてみると「注射なんて打たない」という人が結構多いことが分かりました。

社会には接種券が届かない人も多くいるはずです。住民票が無い人、あってもその住所に住んでいない人（ネットカフェなどで生活する人）、ホームレス状態の人などがそうです。こうした人には希望があれば「接種券を発行」するように厚労省は自治体に求めています。しかし、立川市ではそうした国の要請も把握されていません。「あくまでも住民基本台帳に登録してもらうことが基本です」と話しています。

新宿区では今年の1月末までに区内でコロナに感染した人約 6,150 人のうち、約 4 割が（区内に居住していても）住民登録をしていなかったということです。住民票を基準にしてはワクチン接種もうまくいかないということです。住吉区長は最近、20～30 歳代の若い人を優先にするとすることを発表しています。それぞれの地域において、どうすれば感染防止に有効かを考えていくことが重要です。

■生活困窮者自立支援法の限界

コロナ禍で仕事が減ったり仕事を失った人は多く、「生活困窮者自立支援法」で特例貸付、住宅確保給付金などの一時生活支援事業で何とかしのいでいました。こうした制度も初めは縛りがあり使いづらかったのですが、困窮する人の増大で利用枠がかなり広がり多くの人の助けになりました。

■生活保護制度のさらなる活用を

そのためか、困窮者が増大する割には生活保護の申請は伸びては来ませんでした。それが昨年 9 月以降に急増、今年 2 月で 23,000 件近くに拡大しました。困窮者自立支援法だけでは対応できずに生保申請の増加となったということです。これには支援者側の政府への働きかけで「生活保護の申請は国民の権利」と厚労省のホームページに掲載させたり、4 月から「扶養照会」の運用の見直しも指示されました。現場窓口ではまだ完全に指示が行き届いているとは言えませんが、生保申請へのハードルは低くなったと思います。しかし、2015 年から始まる自民党の生活保護費の 10%切り下げの影響もあり、生保での生活が始まっただけでは支援は終わりません。幼いころから様々な困難を抱えた人々には金銭的な支援だけではなく、これまでに傷ついた心や体を快復させ、将来へ向けた生活の構築を目指して寄り添うような支援が必要です。行政だけでやるのは難しく、社会がこうした人々を支援し見守る姿勢が、安心安全な社会を造り上げることになると思います。

大沢ゆたか（さんきゅうハウス理事長）



自己責任から社会的包摂へ～ 断絶と孤立を防ぐには

さんきゅうハウス法人が契約するアパートに居住する元ホームレス男性（70代）は、重度のアルコール依存症患者である。他者との人間的接触を拒み、アルコールにより身体を暴力的に蝕み続け緩慢な自殺へ向かっている。病院の外で「生きながら死んでいる」社会的な死を迎えつつある彼の状況は、社会福祉が今まで「自立」と定義づけてきた構造と切り離して考えることはできない。福祉政策は、近代家族の体系を受け継ぐ一定のジェンダー規範（私的領域）と自立した市民像（公的領域）をもとに策定されてきた。これらは費用対効果の優先順位に導かれる。作業所やグループホームを作り生活領域を切り分け、施設から就労という政策手段に仲介される過程を経て、病院から薬物治療を中心とする柔構造の医学的管理のもとに徹底される。

今のホームレスの現状と課題は、「生活保護」というセーフティーネットが機能しないことに集約される。一般社会を維持する仕組みの中、ホームレスは「あてがわれた満足」である医療福祉サービスを拒否して路上に戻る。そして結果的に様々な中心的機能と課題の欠落が生じる。彼らは支援者に、大きく言えば社会に受け入れられる為に折れない。社会が公的領域と私的領域の間に人為的に引く境界線を主体的に崩している。彼らが選択する自由、自己決定は自立でもなく社会参加でもない。自己責任と引き換えに待っているのは他者との隔絶と孤立という大きな代償である。

「貧困」は、標準家族世帯累計から外れた瞬間から待ち受けている。アルコール依存等の精神医療の支援を求める多くの人々は入院、薬物療法といった効率的な管理を要求される。「働けなくなったらいけない」と生産性で切り捨てられる脆弱な愛情を基盤とする既存の家族規範は、「親密圏」の両義性を示している。育児言説等々、言説によって構築された役割モデルの追行は「近代」の公私二元論によって支えられた理想の家族像を前提とする。つまり家族は時代的政治的言説によって構築された様々な役割の中心的担い手となり、どのくらい主要な日常の「手

段であり素材」であるかが重要なのである。しかし「自分は何かでできてどのような状態になれるのか」ということをどれだけの個人が十分に把握できているだろうか？「自由」や「主体性」は生易しいものではなく、誰もが既存の社会的規範と構造の中に埋め込まれている。私は1人親であると声にできるが、誰もが自らを客体化し自らの経験世界を「語る」わけではない。奪われた声を取り戻すのは時間にかかることである。さんきゅうハウスの中で語ることさえもできず、また「語る」ことを拒否しながら沈黙して生きる人々がいるという現実がある。新自由主義的な経済構造と医療福祉がいかに個々人の生活や家族関係、身体に影響を及ぼし、人間の生のありようを規定するのか。社会の階層、ヒエラルキーの源は人間の生の深いところに根ざしている。

田中彩（さんきゅうハウス）



パンの寄付 パン工房グラーティア

さんきゅうハウス近くのパン工房グラーティアさんからパンのご寄付をいただいております。

パンは、毎週土曜日のお弁当配布時や、昼まわり、夜まわり時に配布させていただいております。

素材を吟味した様々な種類のパンはお弁当を取りに来られる皆さんにとっても美味しい！と大好評です😊

パン工房 グラーティア

立川市錦町 4-4-5 大山ハイツ 102

アクセス JR 南武線「西国立駅」下車 徒歩 3 分

TEL 042-512-8667

営業時間 11 時～19 時

定休日 水曜日、木曜日



生活保護は充実させるべき！

〇さんを支えた最後の砦

■〇さんとの出会い

2009 年ごろいつも立川駅頭に座り込んでいる〇さん（当時 65 歳）がいました。背は高くはありませんが、大変太っている人でした。声をかけてみると建設労働者だったが会社がつぶれてしまったということでした。

■ビッグイシューの販売者へ

ちょうどその頃、2009 年に「ビッグイシュー」というホームレスの人が販売できる本の発売が始まっていました。私は当時立川市議で事務所を持っていたので、そこを拠点に本を販売者に卸す事業を始めました。〇さんは立川での販売者の第 1 号となりました。

当時は全国でホームレスの人々への少年らによる襲撃や放火や殺人などが頻発して危険でした。駅頭で寝ていた〇さんも本を売ってお金を稼いで漫画喫茶やサウナで泊まってもらうことにしました。

■それでもお金をうまく使えない

しかし、〇さんは知的障害がある人でした。現在ならたぶん養護学校に通っていたような人ですが、お金の計算はあまりできない人でした。本の売り上げが少なくても駅近くの高いサウナに泊まってお金が無くなる人でした。それで数年後に、安定した生活が必要だと思い生活保護の申請をしました。

当時は（現在もほとんどそうですが）まず、無料定額宿泊所（寝る場所と食事は提供されるが、保護費のほとんどを施設に支払う）に行けと言われ、4 人が相部屋で住むアパートでの生活が始まりました。そこから歩いて私の事務所に来て本を仕入れ駅頭で販売をしていました。

その後、アパートへの入居を申請し一人暮らしが始まりました。ご飯は電気釜で炊き、コンビニで缶詰やおかずを買って自分で生活を始め、本の販売は続きました。楽しみは早朝から「競輪場」へ行くことでした。しかし、ギャンブルで車券を購入することはなく、出店のおでんや揚げ物を食べて、知り合いたちと過ごすことが楽しかったようです。

■体調の変化

しかし、体重が増えたりしたのか老齢のためか、だんだん歩くのができなくなり自転車にも乗れなくなりました。そこでビッグイシューの販売を辞めました。

コンビニの ATM からお金を引き出す操作ができなかったので、いつも私が代行していましたが、おろしたお金がすぐ底を突くことが始まりました。金銭管理がうまくできなくなっていました。

■認知症が進行

歩行中に転んで頭を打ったり、立ち上がれずに近所の人に起こしてもらったりということが始まり、介護保険の申請をしました。やっと高齢者支援に繋がり自宅にヘルパーさんが入るようになり、デイサービスに通うことによって少しは安心した生活ができるようになりました。しかし、おなかが空けば早朝 4 時、5 時でも支援者に電話をかけまくり食べ物を買ってくるように要求したり、十分な量を買ってあるにもかかわらず一気に全部食べてしまったりと認知症の症状が進んできました。

■施設入所

市のケースワーカーや地域の福祉事業所と協議しながら、生活保護で入所できるところを探して、やっと最近「サービス付き高齢者住宅」に入所することができました。

出会いは 2009 年だったので、現在で 12 年程付き合ったこととなります。知的障害というハンディを持ちながら普通中学を卒業して北の国にある実家を出て、ほとんど戻ることなく身一つで全国の働く場所を転々としながら一人で生きてきた〇さん。本当によく生きて来られたなと思います。現在は近隣の施設で生活しています。生活保護という制度を活用できたからこそです。「生活保護は最後の砦」です。

大沢ゆたか（さんきゅうハウス理事長）



やり切れないほどの独りぼっち 一路上からの悲鳴が止まらない

反貧困ネットワーク事務局 新型コロナ災害緊急アクション事務局
瀬戸大作



「昨年 3 月に設立した約 40 団体が連携する『新型コロナ災害緊急アクション』のサイト上の相談フォームには、所持金が数十円、数百円という人からの『SOS』が毎日のように届いている。気になるのは、年明けの緊急事態宣言以降、若い世代からの相談がさらに増えた。4 月の緊急事態宣言以降。20～30 代からの相談が 70% を占める状態となった。コロナ禍の長期化で仕事を失い、家賃滞納が続き住まいを強制退去、就労可の在留資格を政府が与えず、医療も受けられない外国人、経済的な困窮だけでなく、助けてともいえず、孤独で孤独で精神的にも疲れ切ってしまった人たち、最近では「死のうと思ったが死ねなかった。最後だと思いメールした」というメールが増えている、新型コロナウイルス感染拡大から 1 年を過ぎた。SOS の内容は日を追うごとに深刻になっている。

私の駆けつけ支援が終了する時間の平均は 21 時 30 分、支援崩壊が近づいている。しかし、これから減少するとは考えられない。貧困に苦しむ人に、いのちと暮らしを守る政治や福祉が存在しないからだ。私たちのような民間の支援団体のスタッフたちはもうとっくに限界に近い活動を続けている。「倒れるのではなか」と「もうこれ以上は止めて」とメールが届く。でも止める事はできない。23 時のメールだった。公園のトイレで、女性が野宿をしていた。「死のうと考えて、その前に最後のメールをしたら来てくれた」と言った。あの時、駆けつけずに翌日回しにしていたら、彼女は生き続けただろうか。さらに深まる一方の困窮、「底が抜けた」といわれる現実に向き合っている。

多いときは週 5 日、生活保護の申請に同行しています。支援団体が一緒なら対応するけれど、困窮者が 1 人で窓口に行くと冷たくあしらわれたり、『働けるでしょう』などと様々な理由で追い返されたりという状況が、あちこちで続いているからです。最近の特徴は精神的にボロボロにされている相談者の急増、精神的困難を抱え心をやられてしまった若い世代が増えている。そこまで追い込んだのは「助けて！と言え人や相談機関がいなかった事、そして、やり切れない程

の孤独だ。コロナが感染したから貧困になったのではない。以前から「助けてと言えない社会」「どうしようもない孤独な社会」だった。私が出会った多くの相談者が言う。「たまらなく寂しかったんです」このように「助けてと言えない」状況に何故、至ってしまったのか、困っている時に福祉の窓口に行った時に「若いのだから生活保護は利用できない」「ギリギリまで落ちたら相談に来てください」「施設入所が生活保護受理の条件です」福祉事務所から、冷たく追い返される事が日常的に起きている。所持金も 1000 円も切り居所もない相談者にも容赦ない。いちばん苦しい時に助けてもらう事も許されない。そのような福祉事務所の対応が、時には「死に至らしめる」事を福祉に携わる人々は自覚してほしい。「福祉が人を殺す」こんな事態が今日も全国のあちこちで起きている。

これまではボランティアが集まり、任意団体として活動してきた「反貧困ネットワーク」だが、増加する SOS や長期化する支援を見据えて、4 月に法人化。『一般社団法人反貧困ネットワーク』として、個室シェルターを増やし、専従スタッフが就労ケアをしながら孤立の防止を目指す。公的支援からこぼれ落ちてしまう外国人支援にも力を入れていく。

希望をつなぐのが「協同」のつながりだと強く意識している。ワーカーズコープと連携して、緊急アクションにつながった相談者を対象にした「しごと探し・しごとづくり相談交流会」をこれまでに 3 回開催。ワーカーズコープで既に就労開始している相談者もいる。「女子会」など当事者主体の自助グループも生まれている。新自由主義の中で使い捨てのようにされ、コロナで仕事を切られたら住まいまで追い出される。もう一度仕事に就くにしても、ブラック企業で使い捨てのように働かされてきた人たちを、そこにまた戻すのかという問題がある。そのような働き方じゃなくて、みんなで支え合って働ける場作りが必要だ。すぐには働けない人もいるから、それぞれの事情に合わせた働く場や居場所を協同の仲間たちと作っていききたい。



多摩地区のコロナ困りごと相談会～点から線へ～松野哲二（府中緊急派遣村共同代表）

2020 年は、新型コロナの恐怖の始まりでした。日本では政府の「アベノマスク」に象徴される無為無策のために「自粛」と「従順」が美德となり、人々の交通、関係も、社会文化活動も制限されました。

解雇も労働条件の切り下げもコロナを理由に自由化され、弱者の淘汰がまかり通りました。憲法 25 条「健康で文化的な生活」は政府によってないがしろにされ、社会運動や抵抗のデモも自粛の強要に沈黙しました。

この時期に考えたのは、2008 年のリーマンショック後に府中派遣村を立ち上げたときのことです。

2008 年末に日比谷公園で行われた「年越し派遣村」に学び、府中で同様の活動を、と考えて始めたものです。東芝、NEC、サントリーなどの大工場を抱える府中では当時、大量の派遣切りが起ころのでは、と憂慮されていました。こうして 2009 年 4 月に府中公園で第 1 回の相談会を開きました。それからこの相談会は毎年末に開催しつづけています。

コロナで助けを求められずにいる人たちへ向けて、年末に続けてきたのと同じような相談会を開催しよう。そう考え、貸出禁止となっていた府中公園の使用許可を高野府中市長に直訴し、市の後援を得ることができました。2020 年 4 月末に行った府中市の「コロナ困りごと相談会」は、54 件の相談が寄せられ、多数の報道もされ大きな反響を呼びました。遠方からの電話相談も寄せられました。

この活動は、他の市へと広がりました。さんきゅうハウスさんも担い手となった立川市をはじめとして、国立、多摩、狛江、八王子、日野と計 7 回の相談会が行われ、相談者の総数は 341 人になりました。

相談は多様で複合的な悩みを抱えている方が多くありました。家庭の崩壊により、6 年前からネットカフェを住まいに派遣労働先を転々としていた青年の場合は、東京都のネットカフェの休業要請で、住まい

も奪われたという相談でした。

ネットカフェで暮らしながら 6 年間政府委託の「交通量調査」をしてきた方もいました。各地を転々とする調査なのでその地域のネットカフェに泊まり歩く生活でした。

女性の相談者も増えています。「主婦パート」のシフト削減や解雇も中間層の崩壊を露出させ、DV、自殺の増加をもたらしています。

こうした声を聞き、少しでも力となり、また継続して支援していく必要があります。さんきゅうハウスさんや、府中緊急派遣村のような民間の団体にできることもあれば、行政に粘り強く声を届けることも重要です。また、こういった活動の形を、より多くの方たちに伝えていくことも求められます。

府中緊急派遣村では、現在、7 つの市で行われた相談会の報告集の刊行準備を進めています。7 つ市の実行委員会それぞれの報告はもちろん、実務的な面も重視して原稿を集め、編集しています。

準備会の討議内容、コロナ対策を徹底した会場の設営、食料配布、チラシの配布、街頭宣伝、SNS、助成してくれた団体、記者会見等報道のノウハウ、生保申請への流れ、相談者へのサポートの工夫、開催後のふりかえり等の内容です。原稿はすでに、相談会に関わったさまざまな立場の方からいただき、2021 年 7 月頃の完成を目指しています。ぜひ頒布にご協力いただければ幸いです。

※『多摩 7 市コロナ困りごと相談会報告集（仮）』頒価 500 円、送料 300 円（手数料込）

※お申し込みは郵便振替でお願いします。[府中緊急派遣村] 00180-2-632677

※振替用紙に氏名、送付先と「報告集希望」とご記入ください。





石の上にも五年～ 仲間で道路清掃

私達、さんきゅうハウス有志は毎週火曜日の昼に、みのお通りの清掃をしています。路上のゴミを丁寧に拾っていく中で、たまに通る人達から「ご苦労様。」「有り難う。」と言われることも。終わって、お茶や雑談を交わしながら清掃は仲間の憩いの場になっています。

なぜ、みのお通りの清掃をということですが、現在の「さんきゅうハウス」が始まる前は、ホームレスの支援施設、怖い人達というイメージが住民にあったので、こちらから地域に発信していく活動をとの思いから始めました。その清掃も今年で5年目になり、ようやく地域の人達にも馴染んでいったのでは、と思います。

今年、4月に青梅市内の高齢者施設に入居された増田(山崎)さんは去年の8月に熱中症で倒れるまで、ほぼ毎週、近くのアパートから清掃に参加されていました。清掃で少しでも歩くことが、リハビリの一環になっていたようです。

そして、去年からアパートに入り参加されている松丸さんは厳しい境遇をへて生活が整うようになってからは、かけがえのない地域清掃のメンバーの1人となっています。地域における住民との信頼関係や、さんきゅうハウスの仲間作りの構築のためにも、地域清掃は不可欠な活動となっています。

星将隆(さんきゅうハウス)



炊き出し弁当継続中！



【お弁当配食】

いつの間にかお弁当配食を始めて1年以上が経とうとしています。毎回 50～60 食をさんきゅうハウスと山本事務所の二カ所で配布しています。本当に多くの人からの支援をいただけて継続できています。メンバーも今年から大学生のあらたくんや柿の木カンパニーの渡辺さん、私の高校時代の友人のお母さんである石井さんが加わってくれました。お弁当はさんきゅうでの調理に加えて青梅のボランティアグループも各週で参加してもらい、お米やお菓子などはフードバンクからいただき、最近では地域の人から衣服をいただいたりなどしています。支援の輪が確実に広がっているのを実感しています。自分の事務所がこのような多くの人の支援の結び目となっていることに大変嬉しく思っています。

【御礼 真如苑さんからのご支援】

実際毎週何十食ものお弁当を作るのは当然お金もかかります。今年度以降のこの事業の継続も資金面での課題があり、頭を抱えていたところ、この度、真如苑さんの助成金をいただき6月以降もこのお弁当配食事業を継続できるようになりました！真如苑さんにはこれまで、別事業で何かと助成をいただいた他、このお弁当配食事業でもフードバンクを通じて多くの甘茶やお菓子などをいただきました。厚く御礼を申し上げます。

山本洋輔(立川市議)

原告の声を聞いて！～生活保護費削減違憲訴訟～

この一年余りでのいのちのとりで裁判についての感想及び新生存権裁判東京の状況について述べたいと思います。まずは、いのちのとりで裁判全国における結果についてです。大阪でこそ勝訴判決をいただきましたが名古屋、札幌、福岡と敗訴が続き大変残念に思いました。大阪の判決こそ妥当であり当たり前と思ってましたがなぜ名古屋、札幌、福岡と敗訴したのか不思議でしかたありません。どの原告団も訴えた内容は差ほど違いありません。なぜ敗訴したのか各裁判長の判決文をしっかりと読み返し対策を考えなければなりません。名古屋の判決についてはこのような話を聞いております。名古屋の裁判長は判決後に昇進を控えており、その為どうしても国に有利な判決を出さざるをえなかった。そこで国民感情からみてもこの判決は妥当であるというような内容が無理やり押し付けられたのだと思ってしまいました。札幌については裁判長の武部という名前を確認した時から嫌な予感がしましたが、原告敗訴でした。東京はこの一年コロナの影響で原告団員の意見陳述が実現しておらず、新たに就任した裁判長に原告団員の願いがしっかり届いているか不透明です。6月14日の弁論は50名傍聴の公開審議になりました。これからの勝訴を目指し油断せず頑張る所存です。神馬幸悦(いのちのとりで裁判原告さんきゅうハウス)



こんなはずじゃなかった…

2021 年バレンタインデー。この日は Free フードたちかわ 第 1 回目の開催でした。

2 月の寒さ厳しい中コロナの影響によって大打撃を受けた経済は国民・市民の生活に直撃し、ある日突然の路上生活を余儀なくされ温かい布団や食事すら食べられない方が都内の炊き出しに殺到しているというニュースを見て「自分にも何か出来ないか？」と周りの方との話し合いからわずか 10 日で 1 回目開催を迎えました。

スピードを重視したため準備期間が短かったにもかかわらず開催当日 40 名の方が訪れました。利用者さんの中には数か月後に出産を控えた妊婦さんが “パートのシフトを削られて収入が半減し出産費用が心配” とのお話を伺いもし自分だったら…と想像すると、これから新しい命をこの世に産む現状として不安は計り知れません。その声を基に生活用品や子供用品の配布を増やせるように努めています。その後も 80 名、110 名、196 名と開催を重ねる度に利用者は増加する一方で寄付や支援の継続を呼びかけています。小さな子を抱っこしたお母さんがポロッと「こんなはずじゃなかった…」との言葉には心がぎゅっと締め付けられました。

誰もがこんな状況になるなんて想像もしてなかった。でも、現実として今日の前で起きている。辛いコロナ禍を乗り切るために互いに思い遣り、皆で手を取り合うことが出来れば良い。愛を感じ笑顔あふれるバレンタインデーを過ごせるように、私はみんなに笑顔を届けたいと思います。

根岸愛希 (Free フードたちかわ実行委員 代表)



月に一度、立川市内の公園で食料、生活用品を配布

子どもに菓子も届けたい



「シフトが減られ収入が少なくなっている。」

「緊急事態宣言で店が休業になり仕事もなくなつた。」など生活困窮者が増えています。コロナ禍では 20 代から 40 代の若者の貧困が目立ちます。さんきゅうハウスで土曜日のお弁当の提供を始めてから、ちょうど 1 年、当初は 20 から 30 食用意していましたが、ここ 1 ヶ月は 50 食でも足りないくらいの状況です。別の困窮者支援団体は、毎月食品などの生活必需品を困窮者に提供していますが、その配布数も 100 個から 200 へと倍増しています。

「もったいない」を「ありがとう」へ をスローガンとして発足したフードバンクですが、このコロナ禍で人の交流が絶たれ、フードドライブ (食品集め) が殆ど出来ない状況が続いています。寄贈品も少なくなっています。他方、必要とする方々は増える一方です。フードバンク立川としてはいただいた助成金で米、麺類 (即席麺 カップ麺)、レトルト食品などの食品を購入しています。これらの食品は、生きていく上でぎりぎりの物です。一人親家庭の子どもには、美味しそうな菓子類をと思いますが、難しいのが現実です。現在も助成金の申請をしています。また、地域の企業や団体にも寄付金や寄贈品のお願いを試みています。コロナ禍で、外出自粛の一方、家庭での消費支出は増えているとの報道もあります。購入したが、いろいろな事情で消費する予定がないものがあれば、是非フードバンク立川に寄贈していただければ幸いです。

高木信雄 (フードバンク立川)



さんきゅうハウス最近の活動

週に1度炊き出し弁当を受け取りに来る人は口コミなどで近隣市から来る人もいて、じわじわと増えています。



さんきゅうハウス会場の電話相談には、多摩地域街頭相談会から継続してライブ相談に来る人も。



第8回のちとくらしの全国電話相談会（4月24日）。さんきゅうハウスは2回線で弁護士、市議、大学教員らが対応。6月12日も実施。



東京豊島区池袋駅付近の公園で隔週土曜日に炊き出しの食料配布、医療相談などを行う支援グループTENOH ASHIがあります。今年4月以降も利用者が増え続け400人近くが食料を求めて並ぶようになりました。さんきゅうハウスも多摩地域に配食する200食のパンを提供していただいている縁で、配布日前日、近隣市のボランティアさんが（株）パルブレッド八王子工場での仕分け・積み込み作業に協力してくれることになりました。

下段はTENOHASHIのスタッフ。



4月7日さんきゅうハウスのスタッフ8名が立川市内の居住支援法人（株）こたつを訪問。家族がいてもいなくても、1人暮らしが困難な高齢者が安心して地域で暮らせるように、アパートの入居支援、見守り、施設の紹介などを行なっている。不動産業でも登録、デイサービス事業所なども併設。事業として居住支援と福祉サービスを実施しているが（株）だからといって営利第一の事業所ではない。写真は丁寧な説明をしてくれた？さん。





カンパのお礼とみなさまからのメッセージをご紹介します

いつもさんきゅうハウスに心温まるご支援をいただきありがとうございます。昨年7月から今年3月までみなさまからいただきましたカンパは約530万円に達し500万円カンパを達成することができました。厚く御礼申し上げます。

毎週土曜日に行なっている炊き出し弁当は30食でスタートしましたが、今年2月からは50食、今では60食でも足りない時があり利用者が増加しています。月曜、木曜のカフェでは、「シェアコーヒー」というカンパ箱を使って、ホームレス状態などお金のない人にもランチを提供したり、困窮者支援や交流の貴重な場として運営を続けていますが、カフェの維持にも経費がかかります。また、借り上げアパートでのシェルター利用をはじめましたが、生活保護費から住居費がでないため（交渉中）維持費がかかります。さんきゅうハウスは困った人、孤立しがちな人たちの居場所、拠り所としてこれからも維持していきます。引き続きカンパのお願いを申し上げます。

☆皆様の活動に敬意を感じています。コロナ禍の年末年始、どうかサポートしてあげてください。明日は我が身。

大田区のAさん

★お互いに決してあきらめず、記憶せよ、抗議せよ、生き延びよ 八王子市のKさん

☆皆様の活動に敬意を払います。共に生きていける社会でありたいものです。国分寺市のKさん

★コロナ禍の中、支援の必要な方々の多さに胸が痛みます。地道な活動を通して、人間としての尊厳を守るため、活動されている皆様に敬意を払います。相模原市のAさん

☆わずかですが、カンパもお送りします。昨年は青梅から出す、私は野良の猫たちに夜食を運ぶ毎日を過ごしています。青梅市のIさん

★戦時中、小学3年生で集団疎開。飢餓の苦しみに耐えられず、歯磨き粉を口にしました。コロナの中、お世話する人々に感謝。豊橋市のYさん

☆ニュースを見聞きする度、心が痛く、何かしなければという思いになります。一人でも多くの方がこの冬を乗り越えますように、祈っております。土浦市のTさん

★7月4日の熊本大水害で被災して、多くの人に助けられ、改めて人と人のつながりの大切さを知りました。少しでも、カンパします。熊本県のHさん

☆支援活動、ご苦労様です。軍事力強化でなく、国民生活向上の政治を求めたいです。福岡県のIさん

★いつも熱心に活動して頂き感謝しています。おっしゃる通り「生きててよかった」と誰もが思えるように力になりたい、どうぞよろしくお願いします。流山市のIさん

★本当に支援する人もされる人も、生きててよかった！と思える社会を作り出したいですね。コロナで家に籠っているシニアです。出費が減っていますので、その分をカンパします。取手市のMさん

☆なんにもできなかった、しなかったことをくやむだけ。この寒空の下に働いておられる皆様に感謝です。京都市のKさん

☆カンパのお願い☆

さんきゅうハウスは生活に困った人、生きづらさを抱えた人に食事、入浴、衣類の提供、就労手伝い、相談、見守り、看取り、フードバンク、カフェなどを実施中です。運営維持のカンパにどうかご協力下さい。

【カンパ振込先】

☆郵便振替

口座番号：00100-4-487905

口座名：さんきゅうハウス

【提供してほしい物品】

テレカ、お米、食糧、電子レンジ、炊飯器、テレビ、新品下着、靴下、新品タオル、Tシャツ、スウェットパンツ、Gパン、スニーカー